

# BOOK REVIEW

## 「地域が動きだすとき——まちづくり五つの原点」

一九九〇年、農文協人間選書

広松伝・森俊介・宮本智恵子・宇根豊・渋谷忠男著

農村振興を考える場合、それは極めて総合的な問題であって農業だけでなく、環境問題や生活問題や教育問題など、幅広い観点が極めて重要になってくる。この本は、環境・医療・食生活・農業・教育のそれぞれを専門とする5人の執筆者によって、それぞれの分野からの町作りの実践を記したものである。

まず地域環境問題の観点からの広松氏の「川さらえが甦るとき、水と共にある暮らしもまた甦る」は、柳川市での住民を巻き込んだの水郷浄化運動によって住民が環境と生活との関わりについて大きく意識を変えていった過程が書かれている。生活地域を共有するという共同意識の芽生えが自然と人間

とのつながりを意識させるものとなっている。この問題を北海道の問題に置き換えるならば、上流のゴルフ場やリゾート開発での自然破壊の問題とつながっている。

地域医療の観点からの森氏の「障害者・老人と共に生きる力を求めて」は、訪問診療や夜間健康学習会などによって、病気に対する予防などの対応に対する意識の向上をとらえている。しかも農作業と健康づくりをからめて実践しているところが、農村における一つの実践として注目されよう。

宮本氏の『おふくろの味』を伝える輪を広げては、地域独自の食文化を伝えることを目指して組織化しつつ、食分化を守るために生産者との交流や食品の安全の問

題などの学習に広がっている実践がとらえられる。

宇根氏の「指導」をやめたとき百姓の創造が生れる」は、農産散布の実践に関わって、一人一人が農薬を減らしていこうとする試行錯誤の実践の中で、地域的個性的な技術が生まれてくることを指摘している。すなわち農薬散布では、主体性のない画一的な指導がなされているが、それは地域によって不適合であるばかりではなく、農民の技術向上にかける意欲や創造力までも奪っているとするのである。ここではさらに「講習会」と「研究会」の違いにも触れ、指導をつける講習会ではなく、自分たちで技術を作り上げる研究会の必要性を強調している。とりわけ北海道の場合は、冷涼で低農薬も追求できるつえに、地域によって自然条件の相違が激しく、一人一人による地域独自の技術の追求という観点は、大事にしなければいけない問題である。

渋谷氏の「地域と学校にかけ橋をかける」は、京都府の小学校で、子どもを地域住民と結びつ

つ、学校の外に出て自然や農業や食生活の問題を考えさせていくという実践が記されている。このことによって子どもが地域に対する誇りや主体性を引き出していくものである。そして同時に子どもの教育に親や地域の人が関わるることによって、地域住民自身の地域への誇りとまとまりを形成しているのである。北海道の場合は、とりわけ農村における学校と地域の結び付きが強く、学校のまとまりや行事への共同関係を無視して、地域をとらえることはできない。本書は北海道の農村振興にも大きな視点を投げかけていたのである。

これらの論文に共通していることは、地域独自の文化と地域住民自身の知恵を発掘する中で、地域の組織化と地域づくりを行っていることである。農村・農業の振興を他方面の視角から考えるうえで、本書は一つ実践的な方向性を示していると言えよう。

(農文協発行、一九九〇年八月刊、定価一六〇〇円)

評者 北海道教育大学釧路分校

講師 玉井康之